「牛めしーバイ、十銭」等とかかれ、汚れた手拭いを首に巻きつけた労働者がたむろしていた。その中の一軒は花屋だったように記憶している。菜の花や、キンセン花が竹筒にさしてある。床の下を川が流れ、風情のあるものだった。通学してゆく朝も、親達は「車に気をつけて」等と言いはしなかった。ましてや、今の親達のように、一日の大半を送り迎えに費やす、馬鹿馬鹿しい時間も、必要としなかったのである。道には、馬車馬が落していったマグソがほっかり湯気を立て、それは呑気なものであった。学校から帰えれば、子供達を集める紙芝居屋の拍子木が鳴り、駄菓子屋の焼芋を焼くかまどには、フカフカした薬火が終日真赤に燃えていた。大樽に芋がつけてあり、棒を荒なわで束ねた洗い棒をまわすと、ピンク色の芋肌が泥の中からあらわれ、手伝った御褒美に火傷しそうな熱い焼芋を新聞紙にくるんで貰った。子供達はそこを溜場にして集団で遊んだ。テレビも精巧なおもちゃもなかったが、素朴なおもちゃがあった。女の子は母や姉が作ってくれた、とりどりのメリンスの端布のお手玉を持っていて、「一番初めは宇都宮、二は日光の東照宮」等と節をつけて唄い、器用な友達は何時までもマリを落さずつき続けた。男の子は竹馬に乗ったり、時にはけんかとっ組合い、絣の着物もはだけ、終日を遊び飽けた。川岸には小魚が群り、橋の上では、おしんこやさんや、お好み焼きの屋台が出ており、柳の下には、朝鮮人の飴屋が、なまりのある言葉で愛嬌を振りまいていた。二銭か三銭の小遣を持たせられれば、一日中親の世話にはならなかった。

落日が川面を染め、家々の屋根が、くっきりと夕空に浮ぶ頃、みんな散り散りに家にかえる。スズメや鳥が群をつくって、夕焼の空に真黒な模様をえがきながら巣へもどってゆく。

あの「夕焼け、小焼け。」の歌そのものの、平和で、美しい光景であった。

夏ともなれば、川端の柳の下に、そちこちから涼み台が出て、子供達は早目に風呂に入れて貰い、汗知らずのほのかな香りをまつわらせ、うちわ片手の大人達が興ずる将棋をのぞいたり、腕角力やあやとりをする。時には赤い帯も初々しい浴衣姿のお姉さんに、氷いちごや氷小豆を御ちそうになってくる。川風はほんとに涼しくて、水天宮や三夜様の縁日に街へ出た折等、川口へもどってくると一返に汗が引いた。今はホテルや色々な建物で埋まっている川口地先も広い砂地の原っぱで、月見草やかれんな河原撫子の花がゆれていた。

土浦堤に桜が消えて幾久しく、年毎に昔日の面影が薄